

聖書：ヨハネの黙示録 22：18～21

説教題：主イエスよ、来てください

日時：2021年12月12日（朝拝）

昨年10月から学んで来たヨハネの黙示録も今日が最終回となりました。ヨハネはこの書を閉じようとする今日の箇所です。この預言のことばに何かを付け加えたり、何かを取り除いてはならないと言っています。勝手に足してもいけないし、割り引いてもいけないと。これはそれだけこの書の言葉に集中して聞き、しっかりここにとどまるように！という警告でしょう。これとほぼ同じ言葉は旧約聖書にも見られます。申命記4章2節：「私があなたがたに命じることばにつけ加えてはならない。また減らしてはならない。私があなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を守らなければならない。」 同12章32節：「あなたがたは、私があなたがたに命じるすべてのことを守り行わなければならない。これにつけ加えたり減らしたりしてはならない。」申命記は、ご存知の通り、約束の地に入る直前の第二世代のイスラエルに対してモーセがもう一度、律法について説教した書です。今、参照した言葉の前後関係から分かることは、これから定住しようとする地やその周りには異教の神々がいるということです。それらの神を拝んで主なる神から離れることがないように、これらの言葉につけ足したり、割り引いたりしてはならないと言われていました。偶像礼拝は、ある意味で付け足しから始まります。主を拝みつつ同時に他の要素をそこに付け加える。そしてそれは結局主の言葉を薄めることにつながり、主の言葉を減らすことに至ります。そして益々主から離れてしまいます。そうならないように、みことばに忠実に、付け加えたり、減らしたりするな！と言われていたわけです。

今日の黙示録の言葉も基本は同じと考えられます。この書が宛てられた当時の教会も偽りの教えに悩まされていました。たとえば2章14節でペルガモンの教会の中にはバラムの教えを守る者たちがいたと言われていました。「バラムはバラクに教えて、偶像に献げたいけにえをイスラエルの子らが食べ、淫らなことを行うように、彼らの前につまづきを置かせた」と続けて記され、偶像礼拝を許容する教えであったことが伺えます。また2章20節にはティアティアラの教会にイゼベルと黙示録が呼ぶ女預言者がいて、彼女についてこう書かれています。「この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。」 当時、主への信仰に堅く立つクリスチャンたちは、ローマ皇帝を拝

む皇帝礼拝に参加しませんでしたし、偶像の宮で偶像を拝むこともしませんでした。そういう彼らは当局者から迫害され、また地域の同業者組合から外され、生活が苦しい状況に追い込まれました。そんな中、イゼベルら偽教師たちは偶像の宮で拜んでも問題ない！心で主への信仰を保っていれば外面的に異教の習慣に合わせても問題ない！と言い、ある信者たちを結局、旧約のバラムと同じように偶像礼拝へ導いていたようです。こういう教えは黙示録にある主のメッセージにないことを付け加えるものであり、またそこからある教えを取り除くことに該当します。このことについてヨハネは警告を語っていると考えられます。

この原則を守らないことが災いをもたらすことは、最初の人間アダムとエバを考えても良く分かります。彼らは御言葉に忠実ではありませんでした。エバはサタンに問われた時、何と答えたでしょうか。彼女はまず園の中央にある木の実について「それを食べてはならない、それに触れてもいけない」と主は言われたと答えましたが、そこには「触れてもいけないと主は言われた」という、実際には主が言っていない言葉を付け加えていました。それによって彼女はサタンの思惑通り、主なる神をより厳しい方と見てしまったことを表していました。また彼女は、主は「それを食べたら、あなたは必ず死ぬ」と言っておられたのに、主は「それを食べてあなたがたが死ぬといけませんからだ」と言われたと答えて、主の言葉の意味を薄めました。それは食べても死なないかもしれない、それならそちらの道に進んでみたいという彼女の欲望による、勝手なみことばの割引でした。その結果、アダムとエバは墮落しました。御言葉に足したり、そこから何かを減らすと、人はこのように簡単に悪に落ちるのです。これと対照的なのはイエス様です。荒野における悪魔の誘惑で、イエス様は3回ともみことばを正確に引用してお答えになりました。足すことも引くこともしないことにより、正しい道を踏み外すことから守られました。ですから私たちはこのヨハネの黙示録を改めて慎重に学ばなければならないと警告されます。ともするとこの黙示録を未来のことを言い当てる予言書のように捉えて、色々こじつけて語る人たちがいます。しかしそれはこの書に何かを足したり、引いたりする罪を犯すことにならないでしょうか。確かにこの書はある意味で難解であるため、解釈を誤ることはあり得ると思います。それが真摯な取り組みの結果なら、そこには主の憐みがあると思います。しかし自分の言いたいことや、好奇心で思いついたことを主張するために、この書を軽々しく利用するようなことはしてはならない。聖書の他の書と同じく、神のことばとして、恐れをもって、忠実にここにある神のメッセージに聞くようにしなければなりません。

またここにあるある種のアイロニーは、この書に何かを付け加える者はこの書に書いてある災害を加えられ、逆に何かを取り除く者はこの書に書いてあることを取り除かれると言われていることです。「目には目を、歯には歯を」です。それが行われたらどうなるでしょう。この書では様々な災害のことが述べられました。主の再臨の日起こる災いととも、それまでの間に起こる災害のことも語られました。それらの災いが、黙示録に何かを加える者の上に加えられると言われています。一方、いのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれるともあります。それらが取り除かれたらどうなるでしょう。その人はもう救いにあずかれなくなるということになります。ですから私たちは足したり引いたりしないように、自分の方が神の言葉より賢いかのように考えて、これを適当に扱わないようにしなければなりません。この章の7節に「この書の預言のことばを守る者は幸いである」とありました。ヨハネの黙示録は神が与えてくださった貴重な書です。宝のような大事なメッセージとして耳を傾け、これに従う幸いにこそ生きる者とされたいと思います。

20節以降は最後の結びです。「これらのことを証しする方」とは、この後の言葉からも分かる通り、イエス様のことです。「これらのこと」とは黙示録全体を指すでしょう。つまり黙示録全体に渡って証しして来られたイエス様が、ここで最後の言葉を発しておられます。その言葉とは「わたしはすぐに来る」というものでした。実はこの言葉はすでにこの章で2回語られました。7節と12節です。3回も繰り返されているという事実を考えただけで、この言葉の重要性が浮かび上がって来ます。さらに今回は「しかり」という言葉が最初につけられています。これによって一層この言葉が強調されています。つまりこれこそヨハネの黙示録をずっと語って来られた主が、その最後に私たちの心に刻むために特別に強調して語っている言葉です。それは私たちへの励ましのために語っておられる言葉でしょう。

これに対する教会の応答の言葉が20節後半に記されます。「アーメン。主イエスよ、来てください。」ここを読んでまず思うことは、果たして私たちはこのように応答するかということです。「わたしはすぐに来る」というイエス様の言葉を聞いて「ちょっと待ってください！」とか「もう少し後でお願いします！」などと慌てたり、あるいは口ごもることはないだろうか。まず「アーメン」と始まっています。アーメンとは「その通りです」という意味の言葉です。心からの同意と願いを表す言葉です。そ

して「主イエスよ、来てください」と続きます。コリント人への手紙第一 16 章 22 節には、「マラナ・タ」というアラム語の祈りの言葉が記されています。それは「主よ、来てください」という意味で、当時のユダヤ人たちが用いていたものでした。それを反映した言葉がここに記されています。ここには主と教会の響き合う関係があります。主がまず「しかり、わたしはすぐに来る」と語り、それを聞いた教会は「アーメン。主イエスよ、来てください」と即座に答える。打てば響く関係。あるいは花婿と花嫁の相思相愛の関係。これが主と教会の正しい関係です。

これまでも見て来た通り、旧約から約束されたメシヤであるイエス様は地上に来られ、十字架の御業を成し遂げ、復活し、天に昇り、そこから全世界・全宇宙を支配しておられます。神のご計画における次のプログラムはと言えば、残されているのは主の再臨だけです。それはいつ起きてもおかしくない段階にあります。そういう意味で主の再臨はいつでも近いのです。しかし主の復活から再臨までの間にどんなことがあるのか、この歴史の最終段階である終わりの日に起こるはずのことについてヨハネの黙示録は記して来ました。そこにはキリスト及び教会と、それに対抗する悪の力との熾烈な戦いがあります。しかしそうであっても、それらはすべて神のご計画の下にあることであり、神はすべてをご存知です。また一切はご計画の通り進んでいます。そしてついにキリスト及び教会の最終的勝利と神の国の完成の日が来ます。それは主の再臨の日をもって実現します。それはどんなに素晴らしい将来であり、主を待ち望んで歩んだ者への報いの日となるかが示されて来ました。このことを見据えて教会は「主よ、来てください」と祈るのです。その日こそ輝かしい日、神の約束が完全に実現する日です。その日を望み見て「主イエスよ、来てください」と応答するのです。

そしてただこの日が来るのを待つだけでなく、その日が来るまで勇気と忍耐をもって主に忠実に従う歩みをするのです。迫害の中でも、逆境の中でも、皇帝礼拝に屈せず、偶像礼拝に屈せず、この世と妥協せず、大淫婦の誘惑に負けず、愛する主にこそ信頼して従う歩みです。そうする人は何も失いません。たとえ地上で肉体的な命を失っても、その人は直ちに天に上げられて、千年間主とともに王として治めると言われました。地上の信仰の生涯を全うした先達たちはみな今そのような状態にあるのです！だから何も恐れる必要はない。そしてついに新しい天と新しい地が現れ、神にすべての目の涙を拭われ、豊かに報われる日が来ます。その日を見つめて「主イエスよ、来てください」と祈り、主に従い続ける歩みに一層進むように！と私たちは導かれて

います。

最後 21 節に「主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように」という祝福が記されます。ここに改めて、ヨハネの黙示録は現実の教会に宛てられた手紙であることを思い起こさせられます。冒頭に「アジアにある七つの教会へ」とありました。またその 7 という完全数の数字をもって全世界の教会が考えられていました。ここで祈られているのは主の恵みです。これは戦いのただ中にある当時の教会がまさに必要としたものでしたし、今日の私たちにとっても同じです。私たちはこのヨハネの黙示録を通して神の絶対主権と将来の素晴らしい約束を知りましたが、後は自分の力で歩むというではありません。やがての日までの耐え抜く力を与えてくれるのは主の恵みです。主を仰ぎ、主に祈り、主から来る恵みをいただいてこそ、私たちは今日という日を、またかの日へと至るすべての日を歩むことができます。また聖書全巻の一番最後の言葉がこれであることを思うことも意味深いのではないのでしょうか。聖書の一番最後の言葉がこれです。「主イエスの恵みが、(主の民である) すべての者とともにありますように。」 こうして主に頼り、主に祈り、主の恵みの力によって、やがての祝福の日を目指して歩め！という奨励・祈りで聖書は閉じているのです。

私たちはヨハネの黙示録を読み終えるにあたり、今日の箇所を読んだ主の最後の言葉をいつも自分の心に響かせたいと思います。主イエスはこの最後の章で繰り返し語った後、最後でもう一度強調をもってこう言われました。「しかり、わたしはすぐに来る。」 これは脅しのための言葉ではありません。これは私たちの励ましとなるための言葉です。イエス様はこの黙示録全 22 章をかけて私たちに証ししてくださいました。御使いを遣わし、また様々な象徴的幻を通して、主の復活からご自身の再臨までの期間、どんなことが起こるかを繰り返し、繰り返し、示してくださいました。そして主の再臨が起こった暁には、どのように素晴らしい世界が出現するか、御国の完成の状態はどのように栄光に富んだものであるかを垣間見せてくださいました。私たちはこの預言の書に感謝し、これに付け足さず、また差し引かず、その通りに心に刻んで、主が意図されたように、この書から大いなる励ましを頂く者でありたいと思います。主はその最後に強調して言って下さいました。「しかり、わたしはすぐに来る。」 この主のお言葉に対して、私たちは心からの感謝と希望を抱いて、お答えしたいと思います。「アーメン。主イエスよ、来てください。」 そう告白し、祈って、主が備えてくださった栄光の日に向けての歩みを強められ、整えられる主の花嫁なる教会の歩み

へ導かれて行きたいと思います。